

# 音声学・音韻論の研究

山田 英二

今期(2014.4-2015.3), 英語音声学・音韻論分野では, 強勢, 音調, 言語の起源, 日本人英語に関するものなど多彩な論考・著作(総計106篇(冊))が見られた。

国内の学会誌や紀要におけるこの分野の論文は, 45篇が目にとまった。主なものを順を追って紹介する。

1. Christopher Tancredi, “The Phonology of Accent” (慶應義塾大学『言語文化研究所紀要』第46号)——本論文は, 発話(談話)内での「焦点」と「ピッチアクセント」の関係について, Truckenbrodt (1995)における定式化のみでは捉えきれない様々なタイプの談話を取り上げ, それらを分析するための方策を探った意欲的な試みである。例えば, (1) Mary was at the party. JOHN SAW *her*. という談話において, JOHN, SAW には共にピッチアクセント(大文字で表示)が与えられ, *her* (斜字体で表示)には与えられない(この場合, SAW を焦点とする)。これに対し, (1)の変異形((1)とは意味が異なる)として(2) Mary was at the party. JOHN *saw her*. という談話も可能である。(1)のタイプは Truckenbrodt (1995)により問題なく説明できるが, (2)はできない。そこで, 本論文では, 統語論において G-marked (既知指定)された語(この場合は, *saw*)には, DemoteG という最上位の制約が働くことで, 音韻論上では韻律構造が構成されないという着想の下で, 説明しようと試みている。本論文をきっかけとして, 音韻論と統語論のインターフェースへの関心が高まることを期待したい。

2. Shin-ichi Tanaka, “Two Phonologies or One?: Some Implications of the DYG for Bilingualism” (日本英語学会『English Linguistics』Vol. 31)——本論文は, Samuels (2011) *Phonological Architecture: A Bilingual Perspective* に対する「書評論文」であるが, 論文と呼んでも差し支えないほどの内容を持っており, いま最もホットなテーマを取り扱っている。議論は Hauser, Chomsky and Fitch (2002) において, “Merge-only FLN” の掛声のもと, 音韻論が FLN (Faculty of language in the narrow sense) の部外に出されたことに端を発する。それに対し, Pinker and Jackendoff (2005) が, 音韻論中に見出される顕著な特徴はヒトという種・言語に固有なものであると述べ, 反論を行った。これに対する生物言語学からの一つのレスポンスとしての再反論が Samuels (2011) であった。Samuels によると, 音韻論における諸現象は, 領域に限定されない一般的な特性により説明できるという。つまり, 従来の音韻論が扱っていたのは, 他の動物が示す特性と同じものであり, ヒト固有の特性ではない。

ヒトが示す音韻の特徴は、SEARCH, COPY, DELETE などの一般的特性の「組み合わせ」であり、この組み合わせだけが、I-language (i.e. UG) に属し、その他は E-language の分野にあるという。それに対し、本書評論文の著者は、“the Duke-of-York Gambit” と言われる  $A \rightarrow B \rightarrow A$  タイプの派生を示し、この現象は、言語獲得や歴史変化に関わる E-“phonology” のみではなく、共時音韻論にも見られ、I-“phonology” にも属するものだという。そのため、適正な言語理論としては、I-phonology, E-phonology を共に含むものを構築する必要がある、それは著者の主張する Turbid Optimality Theory により可能であるとする。新理論の提案をも含む非常に刺激的な論考であるといえる。

3. Bridget Samuels, “Biolinguistics in Phonology: A Prospectus” (日本音韻論学会『音韻研究』第 18 号)——上記の Samuels が 2014 年夏の日本音韻論学会「Phonology Forum 2014」で行った講演内容の一部を纏めたものである。生物言語学の全体像が音韻論に即して手短かに述べられ、SEARCH と COPY の具体例も示されている。

4. Noriko Hattori, “Apparent Exceptions to the Syllabic Distribution Algorithm for English” (三重大学英語研究会『PHILOLOGIA』46)——本論文は、英語の声楽曲において、歌詞中の言語的「強勢音節」と曲の「強ビート」との対応関係「強勢音節—強ビート」(Stress-to-beat) に一致が見られないと思われる事例を調べ、一見すると一致していないように思われるものでも、実は一定のアルゴリズムの下、適正な調整を図っている事象を数量的に示したものである。発話と音楽とのインターフェースを取り扱う本研究の、今後の更なる展開が注目される。

5. 平郡秀信「ME /ai/ と ME /e:/ の融合について」(中京大学『国際教養学部論叢』第 7 巻第 2 号)——ME /ai/ と ME /e:/ の融合に関して、主に脚韻からの膨大でかつ緻密な証拠を示しつつ再検討を行い、蓋然性の高い推論を提案している。

6. Chung-Yu Chen, “Direction of Stress Shifts in Noun-Verb Pairs and Progressions in American and British English” (日本英語学会『English Linguistics』Vol. 31)——本論文は、動詞と名詞という 2 つの範疇を示す同一形態 2 音節語における強勢移動を取り扱っている。Sherman (1975) は、当該 2 音節語の強勢配置は、(a) oxytone (名詞も動詞も強勢は「後」) → diatone (名詞は「前」、動詞は「後」、いわゆる「名前動後」型) の経時変化と (b) paroxytone (名詞も動詞も強勢は「前」) → diatone の経時変化の 2 つのタイプが見られるとした。それに対し、本著者は、現在進行中の経時変化は、上記 2 タイプではなく、oxytone → diatone → paroxytone という連続した 1 タイプになると、辞書の記述を基に示した。

7. No-Ju Kim, “A Tonal and Metrical Approach to the English Primary Stress in Derived Words: An Abridged Version” (日本音韻論学会『音韻研究』第 18 号)——英語派生語の主強勢分析において、接辞を Class I, II の 2 つに分ける語彙音韻論の方法

ではなく、音調(トーン)と韻律を基にした自律分節的手法を用いれば、英語は強勢言語と音調言語の間とみなせるという。ただ、[±循環][±dominant]という接辞分類法にも言及があれば、更に良かった。

8. 神山孝夫「ヨーロッパ諸語における様々なr音について——起源と印欧語学への示唆」(大阪大学大学院文学研究科『待兼山論叢』第48号)——ヨーロッパ諸語にみられる様々なr音は一定の順を追った変化の過程を示している可能性があるという指摘がなされている。

9. 塩見友里恵「日本人英語学習者による子音結合の産出——阻害音の有声・無声と子音結合の有標性」(同志社大学英文学会『Core』43・44合併号)——母語に存在しない英語音連続を日本人英語学習者が発音する際の方策について、発話実験を基に、有標な有声音結合ほど母音挿入などの操作が起こりやすいことを示した。

10. Yoko Mori, Donna Erickson, Albert Billiard and Tomoko Hori, “Effects of Vowel Duration, Intensity, and Articulation Rate on Judgments of Naturalness and Intelligibility of Japanese Learners’ English” (日本音声学会『音声研究』第18巻第2号)——日本人が話す英語について、母音長に焦点を当てた知覚実験を行った結果、機能語の母音長を短縮するとより「自然」で「わかりやすい」と英語母語話者は判断するという。

単行本は下記2冊が目についた。

1. 大名力『英語の文字・綴り・発音のしくみ』2014. 研究社。2. 西原哲雄・高橋潔・中村浩一郎『現代言語理論の概説』2014. 鷹書房弓プレス。

国外に移る。38篇の論文が見出された。紙幅の都合上興味深いと思われるものを、タイトルのみになるが順不同で5篇のみを示す。

1. Y. Mori, T. Hori and D. Erickson, “Acoustic Correlates of English Rhythmic Patterns for American versus Japanese Speakers (*Phonetica* 71) 2. Lev Blumenfeld, “Meter as faithfulness” (*Natural Language and Linguistic Theory* 33) 3. Georgia Zellou and Meredith Tamminga, “Nasal coarticulation changes over time in Philadelphia English” (*Journal of Phonetics* (以下JP) 47) 4. Cynthia G. Clopper and Rajka Smiljanic, “Regional variation in temporal organization in American English” (JP 49) 5. Gregory R. Guy, “Linking usage and grammar: Generative phonology, exemplar theory, and variable rules” (*Lingua* 142)。

単行本は、21冊が出版された。その中でも主なものを順不同で5冊のみ示す。

1. Jacques Durand, et. al. (eds.), *The Oxford Handbook of Corpus Phonology*, 2014, Oxford UP. 2. Ee-Ling Low, *Pronunciation for English as an International Language: From Research to Practice*, 2015, Routledge. 3. J. C. Wells, *Sounds Interesting: Observations on English and General Phonetics*, 2014, Cambridge UP. 4. Kamil

## 回顧と展望

Kaźmierski, *Vowel-Shifting in the English Language: An Evolutionary Account*, 2015, De Gruyter Mouton. 5. Mehmet Yavaş (ed.), *Unusual Productions in Phonology: Universals and Language-Specific Considerations*, 2015, Psychology Press.

なお、今回検討した音声学・音韻論に関する今期の全文献 106 篇 (冊) のリストは『英語年鑑』刊行後半年ほどして [http://eym.sakura.ne.jp/public\\_html/en/2016/en2016.html](http://eym.sakura.ne.jp/public_html/en/2016/en2016.html) に掲載される予定である。 (福岡大学教授)